リスクがなければ挑戦とは言えない
必ず成功させるという意欲が必要なのです

――ホタテの増養殖を始めようと思った経過についてお聞かせください。

白糠漁協　柳谷法司代表理事組合長（以下、**柳谷組合長**）　これまでは17～18億円だった水揚げ額が、ここ5年くらいは12～13億円と、非常に厳しい状況が続いています。このままでは、将来に対する危機感が増すばかりで、白糠漁協としても何かしらの手を打たなければならないということを、ずっと考えてきました。白糠漁協の職員や漁師の生活を考えたならば、最低でも15億円は必要です。ですが、それが難しくなってきました。一番の原因は秋サケの水揚げが落ちていることです。それを盛り返すために、タコや毛ガニ、ホッキの漁獲量を増やしてしまえば、いずれ資源が減って共倒れになりますので、それは絶対に避けなければなりません。そこで選んだのがホタテの増養殖です。新たな魚種をつくり育てるという栽培漁業を考えました。沖には波が立ちますので、陸での増養殖も考えましたが、費用対効果の面で、非常に難しいという結論に至りました。ホタテの増養殖は根室市や厚岸町、浜中町でも行っています。規模は小さいのですが、それは湾の中でやっているからです。白糠町には湾がありませんので、外海でやることになりますが、外海なので当然波があります。もしかすると赤潮の影響もあるかもしれません。かなり厳しい状況だということは承知しています。甘くは考えていません。ですが、成功する可能性がゼロということはないと思っています。可能性が少しでもあるのなら、チャレンジしてみなければ「ただ困った」と嘆いているだけでは終わってしまいます。今、小倉さんのいた湧別漁協にいろいろと協力をいただいていますが、湧別でも初めから良かったということはありません。それが何十年もかかって約100億円という今のような水揚げ額になっているのです。今回の実証実験において、1000万粒の稚貝がたとえ1～3割程度しか残らなくても、将来への可能性は十分あると思っています。

通称「八尺」と呼ばれるケタ網を使ったホタテの漁獲（湧別漁協）

――リスクは承知の上でもやらなければならない状況だと。

柳谷組合長　そうです。リスクがなくてできるなら、すでにみんなやっています。誰もやらない、誰もやれないということは、それだけのリスクがあるということです。ですがこのままだと、水揚げ額は下がる一方で、10億、9億となっていけば、誰も漁師を続けてはいけません。将来、細々と何十人かの漁師が残るだけでいいのでしょうか。

今はタコや毛ガニ、ホッキは安定していますが、これらの魚種も過去には資源確保のため禁漁になったことがあります。どの魚種もそうなのです。ですから、新たな魚種でなければ意味がありません。「失敗したらどうするんだ」という人もいますが、リスクがなければ挑戦とは言えない。必ず成功させるという意欲が必要なのです。もし、これが成功したならば、間違いなく次世代の漁師たちも安心して漁業を営むことができるだろうし、町にとっても基幹産業の一つになると思っています。みんながこの仕事をして良かった、働いていて楽しいと、幸せを感じることができる環境を整えることが我々経営者の使命であると思っています。

――昨年、町で漁場の可視化調査を実施しました。このことは、ホタテの増養殖事業にもプラスになったのではないでしょうか。

柳谷組合長　もちろんです。私も50年以上漁師をやっていますので、海底がどうなっているのか、ということは頭の中ではイメージすることができます。ですが、実際に見たことはないですから、可視化調査により海底の地形や潮の流れ、どの場所にどのような魚が生息しているのか、といったことが具体的に分かるようになりました。こうしたデータを今後どのように生かしていくのかは、我々漁業者の役目です。また、可視化調査をしていただいた渋谷潜水工業の渋谷正信社長とは幼馴染ですので、これからもいろいろなアドバイスをいただきながら、ホタテの増養殖事業は絶対に成功させたい、いや必ず成功させるんだと、そう強く思っています。

柳谷法司（やなぎや のりじ）さん
昭和24年4月5日生まれ。白糠町出身。漁師になるため白糠高校を中退。平成7年12月から白糠漁業協同組合の組合長を務めている。妻との2人暮らし。趣味は読書、パークゴルフ。